



502 講談社現代新書

万葉びとの一生

『万葉集』には、誕生を喜ぶ歌がない――。

万葉びとにとって、肉体の出現という誕生より、氏神によって氏子として認知され、仲間によって、その存在が確認されることの方に意味があった。なかでも、もつとも重大な意味をもったものが、「冠」^{かむり}、すなわち元服の儀式であった。

本書は、記紀・万葉を通して、万葉びとの一生を、年中行事と冠婚葬祭を糸口に、誕生、成人、恋愛、結婚、親子の愛、旅、そして葬送とたどりながら、

日本人の生き方の原像を明らかにする。

池田弥三郎

折口信夫の民俗学を継承する、筆者ならではの力作。



くさくさ

万葉びとの一生

昭和五三年三月二〇日第一刷発行

著者——池田弥三郎

© Yasaburo Ikeda 1978 Printed in Japan



発行者——野間省一 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―三 郵便番号二二 電話〇三―九四五―二二 振替東京八―三九〇

装幀者——杉浦康平・鈴木一誌

印刷所——凸版印刷株式会社 製本所——株式会社大進堂

●——定価はカバーに表示してあります

落丁本・乱丁本はおとりかえします（学一）

池田弥三郎



采びとの一生

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

講談社現代新書

はしがき

『万葉集』を中心にして、古代の日本人の一生を、ひとわたり眺め渡してみようとして計画したのが、この小著である。と言っても、もちろんその記述の筆は、『万葉集』に留まることなく、『古事記』、『日本書紀』、『古風土記』など、『万葉集』の前後の文献にも触れることになるだろうし、場合によっては、次の時代の『古今和歌集』や『伊勢物語』などにも、自由に出入りすることになるだろう。

それでは、そういう小著を、なぜ『万葉びとの一生』と名付けたのか、ということをも、まず言わなければならぬが、そうすると、さらにその前提として、そもそも「万葉びと」とは、どういうことかということについても、説明しなければならなくなる。しかしそれは、今ここで急いで言わなくても、本文の中で、徐々に明らかになっていくことだと思われるし、いわば、この小著全体が、その解答でもあり、また解説でもあるというわけなので、それは本文の記述に譲りたいと思う。

もちろん、万葉びとの一生と言ったところで、どのみち、日本人の一生の一環であることは、今さら言うまでもないことであろう。だからまず、日本人の一生について考える、手がかりが欲しいと思う。

わたしは今まで、日本人の生涯において、日本人が遭遇する行事を、年中行事と人生行事とに分けて考えてはどうかと思ってきた。人生行事ということばは、ことばとしてはまだ熟していないし、必ずしも適切だとも思わないが、ほかに思いつくことばもないので、しばらくこれを使っていききたいと思う。

今まで日本人が、人生行事ということばにおよそあたることばとして使ってきたことばは、「冠婚葬祭」ということばではなかったかと思う。もちろんこのことばは、日本人の生涯にわたって点在している行事のすべてを覆っているわけではない。ただ、万葉びとの一生を考えていく糸口として、このことばの検討から進めていききたいと思う。

なおわたしは、『万葉集』はマンニョウシュウと言っている。したがって、万葉びとはマンニョウビトであるが、しかしこれは、今はマンヨウシュウという言い方が普及してしまっているから、マンヨウビトと言われても致し方ないと思う。しかし万葉びとは、万葉人とは表記したくない。そう書くと、マンヨウジンと言われそうだからである。これはどうしても「万葉びと」と言ってもらいたいからである。

目次

はしがき

第一章 冠婚葬祭

年中行事と人生行事／「個人」の生涯と「集団」の表現／人生の「以前」と「以後」／冠婚葬祭にない誕生／産育の習俗／日本人の一生と「誕生」／「冠」をもって示す「誕生」／年齢通過儀礼／「冠」の完了と「婚」の成立

9

第二章 万葉びと

折口信夫と「万葉びと」／ひろがりもつ「万葉びと」／「四つの」の自覚／伝承詞章の成立と誕生

31

第三章 成人扮装

43

をどこに對するを、とめ／三段階のを、とめ／うなるはなり／わ
らはとうなる／髪上げの儀式を待つ女性／掻き入れ髪／「誰
かあぐべき」／男女関係のしるし／神秘的靈力もつ髪の毛

第四章 母子抒情

63

変らぬ親子の情愛／家郷をしのばせる鶴の声／憶良の親心／
防人の父／父母にとってのまなご／父母の長命を願う心／家
に残していく魂／防人の心情と昭和の召集／「かへりみなく
て」／隠された旅立ちの習俗

第五章 民謡の母

89

空想の所産、民謡の母／監視者としての母／母の目をかすめ
て／ユーモラスな民謡の味／「簪入り」婚／よばひの習俗

娘のよばいを助ける母

第六章

伝承の女

105

「聖なる処女」真間のでこな／「処女塚」／死にゆく処女／「神」
との結婚／聖水を管理する処女／清らかな水に映る人影／説
話の種子、てこの呼び坂

第七章

早く日本へ

125

歌心を刺戟した旅／望郷の歌／天の原ふりさけ見れば／歌わ
ぬ異国の風物／地名に籠る国魂／伝承から歌枕へ

第八章

御坂かしこみ

137

神の蟠踞／羈旅歌と地名／大事なものを要求する神／神への
媚態／古伝承の中の神／後の命を要求した神／手向けの場
所／手向山の紅葉／道祖神の威力／有間皇子の祈願

第九章 み雪ふる秋

みゆきと深雪／自然の選り好み／雪と季題／「雪見」の背景／
伝承の素材としての雪／吉野の雪／秋の「御雪」／冬と春の混
乱／信仰に根ざす季節感

157

第十章 朝影になりぬ

大伴家持のメランコリー／アサ・ヒル・ユフ／朝影にわが身は
なりぬ／帯・紐にまつわる民俗信仰／朝影の謎／靈魂として
のかげ／「あさめよく」／万葉びとの一日／「あかとき」

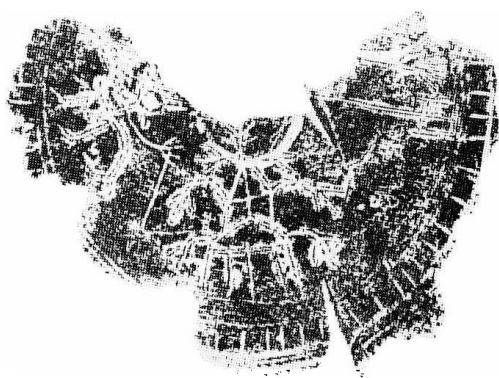
177

第十一章 死とその後

「過ぎにけむかも」／相聞歌か挽歌か／詞書・部立てと解釈／
解釈を変えた歴史／儀礼的形式からの脱出／排列の効果／挽
歌語彙／妻への哀傷

195

祭の場を描いた「戯画」——家、幡、馬の刻まれた平瓶の拓本・七世紀



第二章——冠婚葬祭

年中行事と 冠婚葬祭という語は、もちろん、中国の文献にでてくる語であって、それをいつ

人生行事 の頃からか、日本人が借りて用いるようになったのであろう。冠は元服の行事、

婚は結婚の行事、葬は葬送の行事、そして祭は死者の祭祀の行事である。しかし、一人の人間の一生を考えてみると、その起点は「誕生」であるはずだが、なぜかこの四文字をもって表わされた、人生の四大行事の中には、誕生が加えられていない。

したがって、日本人の一生に沿った諸行事は、けっしてこの四文字の表わすことがらだけではない。そこでわたしは、冠婚葬祭という人生の整理標目を考えながら、人生行事という語を使おうとしたのだが、この語は、年中行事という語を念頭に置いて考え出したのだから、まずこの両者を併立させて、考え進めてみたい。

ごく平凡な一人の日本人が、最大多数者の中の一人として、その凡俗なる生涯において遭遇する諸行事は、およそ、年中行事と人生行事とに分けられる。もちろん、個人個人の人生においては、突発的な事が起こるけれども、それらはまず記録され伝えられることがない。個人個人の生涯においても、記念され伝えられていくことは、まず、誰の人生においても遭遇するはずの、繰り返される行事である。

年中行事とは、「一年」の周期をもって、繰り返される、周期的行事であるが、少しく考えを拡げてみると、周期的行事の周期は、一年には限らない。ある種の祭りになると、六十年に

一度というものもあり、また、六年に一度という周期のものもある。六十年に一度の周期では、一人の人生では、まず二度とは遭遇しないということさえ多いであろう。

しかし反対に、もっと短い周期の行事もあって、半年に一度という繰り返しや、三月に一度、月に一度のものもある。月に一度の行事は、これを月次つきなみというのだが、さらに極端には、一日に一度という、日中行事もある。また、以前の「一日十五日ついたちじゅうごにち」という周期は、今日ではすたれてきて、生活の周期が今日では一週間という区切りになってきている様相も顕著である。しかし、最近では特に「五、十日ごとおひ」ということが言われ出している。これは五日の周期である。

ともかく、周期的行事の単位としては、「一年」という、自然現象の周期と、それにもとづく暦年の単位が、まずもつとも普通だろうと思う。したがってそれらの行事は、早くから「年中行事」を名告る書物にまとめられ、また「歳時記」という書物に、蒐しゅう集整理しゅうりゅうされたりもしてきた。

「個人」の生涯と

行事といっても、国家的規模のものもあるが、普通われわれの考えている

「集団」の表現

ものは、それぞれの個人の所属する小社会——たとえば、むらなどを単位

とするもので、この行事という語は、言い替えれば「祭り」ということになる。そして、むらよりも小さい単位の、家ごとに行なわれる「祭り」もあり、それは普通「こと」と言われてい

る。

これに対して、人生行事ということになると、個人個人の人生が中心になって、年中行事に比べて、ずっと個人的色彩が濃くなるように思われるかもしれないが、じつは、人生行事の対象となる個人は、あくまでも「集団」なり、「階級」なりの中の、「一人」に過ぎない。だから、個人と言っても、近代以降の社会生活の中での個人とは、おのずから異なっていることになる。

個人個人の場合に、それぞればらばらに起こってくる、誕生と死去とは、生物としての人間の場合、人種も民族も超越した、共通の事象ではあるけれども、その一生の起点から終点までの間に点在する諸行事は、一人一人の、個々ばらばらなものではなく、やはり、その所属する、むらなり、集団なり、階級なりによる特徴を維持している。つまり、年中行事が一年を単位とした周期的な繰り返したとすれば、人生行事は一人一人の人生を借りて、繰り返されている行事だと言うことができると思う。

日本人の一生は、この年中行事と人生行事との交錯の中に、経験されていく。政治史などの表面に位置を占めている「個人」は、その固有な特色のために、歴史を形成しているけれども、凡俗の生涯を生きていく、名もなき民の一生は、およそ大同小異の類型を形成し、その中に埋没してしまっている。固有の名のある「個人」にしても、もちろん、その類型と全く無縁

の存在ではない。むしろ逆に、その「個人」の生涯として伝えられている一生のうちに、わたしたちは「集団」の表現としてのそれを探ることができる。

人生の「以前」

日本人の一生も、その個人個人においては誕生に始まり死去に終わる。しかしそれはただそれだけがあるのではなく、その個人の預り知らぬ、永い「それ以後」

と「以後」と、永い「それ以後」とを、その前後の引き続きとして持っている。

「それ以前」とは、先祖代々の生涯に続くものであり、その個人の所属する、家なり氏なりの中にあるもので、継ぎ文と称する系図・系譜によって、伝えられる「本人以前」である。また、仏教的な考え方からすれば、「現世」に色濃く影を落している「前世」でもある。

「それ以後」は、冠婚葬祭の「祭」と関連してくる面もあり、年中行事のお盆とも関係があり、さらに、個人個人の命日、年忌（回忌）などの考え方の中に、今でも濃く投影している。

それはまた「あの世」の考え方の中にもあり、仏教的な「輪廻」の考えとも関連している。特に日本人的だと言われる「七生報国」などの考えの基にある、「七度生まれ替る」といった考えも、個人の「それ以後」である。

これらのことは、日本人の幸福観にも結びついてくることである。後にまた触れることになるであろうが、ともかく、「冠婚葬祭」の以前以後を併せて考えることによって、日本人の一生は、永い永い時の経過の上に、個人個人の個的な区別は消滅してしまい、そこに、繰り返さ

れる生涯が際立ってくるのである。

じつを言うと、日本人の一生とは、遠い所——そこはたましいのふるさとともいふべき所——からやってきた靈魂が、人間の肉体に宿って成育し、さまざまな遍歴を経て、ふたたび、遠い所へ帰っていく、その、この国土における靈魂の、来臨・成育・遍歴・退去の期間の時間的経過である。その経過の途上における、折り目折り目の、竹の節のようなものが、人生行事だといふことができる。そして、遠所における靈魂を考えることによって、日本人の現世における人生の以前以後が考えられる、ということになるわけである。

冠婚葬祭に　それではなぜ、冠婚葬祭という、四文字による人生行事の掌握の中に、「誕生」ない誕生　という、人の生涯の起点が含まれてはいないのだろうか。そもそも「誕生」と

は、日本人の人生にとっては、どのような「点」であり「節」であるのだろうか。

日本人は、その生死の時刻が、潮の干満に関係していると信じてきている。すなわち、潮のさしてくるとき、満潮時に向って生まれ、潮のひいていくとき、干潮時に向って死ぬと言われてきた。もちろん、今日の人為的な出産や、突発的な横死などの場合は別として、普通平穩な生死が、はたして言われている通り、潮の干満に関係があるかどうかは、病院にでも行って、事例を集めてみればはっきりすることである。しかし、そういう調査を試みた上で、伝承の真偽を判定してみたところで、それは別に日本人の生死についての民間の知識とは関係のない

ことである。問題は、なぜ日本人が、人生の起点と終点とを、海水の干満に結び付けて考えていたのか、というところにある。そしてそれはおそらく、前に述べたように、遠所にあるたましいのふるさとと、この国土との間の、靈魂の来往らいおうということと関係があるのだらうと思う。

たましいのふるさとが、海の彼方の遠い所にある、と考えた、この考えは、やがて日本人の居所きょしょの移動によって、海から山にふり替えられていくが、今はそれについては触れない。

ともかく、日本人の誕生とは、海のかなたからやってくる靈魂が肉体に宿ることと関係があり、死去とは、その靈魂が肉体を離脱して、海の彼方へ帰って行くことと、関係があつたのだと思う。そこに、日本人の「生まれる」ことと「死ぬ」ことが、現象として考えられたのであろう。

しかし、たちねの胎内たないからの肉体の出現が、すなわち「誕生」であつたかどうかということは、なお考えてみる必要がある。つまり、出現した肉体が、ただちに「人間」の仲間入りをすることを許されたかどうかということは、なお、問題を残しているところである。

古代の記録類は、主として宮廷を中心とした伝承であるために、それらを直接に、いわゆる民衆の一人一人に適用することができかどうかは問題があるが、伝承の中に語られているような、天皇、もしくはごく上流の貴族階級の人々の場合には、肉体の出現という、今日普通に考えられている誕生と、靈魂がその肉体にはいることは、別段のこととして考えられてい